

【受験生特集】— さまざまなキャンパスライフを紹介します

神奈川産学チャレンジプログラム

ゼミでの学び 実践で評価

3チームが最優秀賞

神奈川県内の13大学・112チームが参加した第4回神奈川産学チャレンジプログラムの表彰式が12月12日、横浜ワークぴあで行われ、本学からは最優秀賞3チーム、優秀賞4チームが表彰された。企業から提示された課題を、学生たちが、日ごろの学習成果を生かして解決のためのプランを提案するこのコンテストは、県内の大学と、(社)神奈川経済同友会が、産学連携による人材育成を目的に実施しているもの。

表彰式後、商学部の山口圭太さんから3人は、約300人を前に研究成果のプレゼンテーションを行った。入賞7グループからのメッセージを紹介しよう。

※敬称略。()内はゼミと学部学年。〈 〉内は企業名と課題

【最優秀賞】

山口圭太、加藤泰史、佐藤基之(中村博ゼミ・商4)
「相鉄ローゼン・スーパーマーケットのブランドイメージ戦略」

4年間の集大成に

大学での学びの集大成を評価してもらえる絶好のチャンスと思い、応募。画一的なイメージのあるスーパーマーケットの差別化には、ゼミで学んできたマーケティングなどの知識を活用できると研究を進めたのですが、ゼミ内での中間発表で「論理性に欠けている」と指摘され、連日徹夜で資料を作り直したので、論理性には絶対の自信をもって、経営幹部の皆さんの前でプレゼンできました。団塊世代の男性をターゲットにした新しい店内レイアウト(MTSレイアウト)に高い評価をいただき、努力を認められ、うれしく思っています。「最優秀賞」と、表彰式のプレゼンは、学生生活最後のいい思い出になりました。



▲表彰式での落ち着いたプレゼンテーション

【最優秀賞】

大田拓司、吉田誠、大窪結、大田実央(高柳美香ゼミ・経営3)
「京急百貨店・少子化対策に対応した新しいサービスの提案」

ディスカッションから実践へ

マーケティング・コミュニケーションを専門とする高柳美香ゼミでは、ディスカッションを中心にしていますが、実践的な学習にトライしてみようと参加を決めました。少子化の中、百貨店がどのような戦略を立てているのかに興味があり、研究をスタート。大人が楽しむことが中心の百貨店に、子どもが行きたくなるような楽しめるコンセプトの提案と、連れてくる親たちには、安全性を提供することを考えました。



▲高柳准教授(中央)と



▲関口紀正代表取締役と記念撮影

ゼミと同じように活発に意見交換をして、全員の考えを融合して出したプランです。ただ、スケジュール通りに研究が進まなかったのが、時間の有効な使い方が、今後の課題です。

【最優秀賞】

長谷川直子、酒井恋美、新保竜也、高田麻里絵、杉原和典(新井範子ゼミ・経営3)
「関口商事・湘南平塚に合う「ショ袋」の考案」

実際に調査し、生の意見を聞く

210人の街頭調査と、女子中高大生100人に実施したアンケートから、ターゲットを若い女性に、湘南の「青」、注目されるように「ビキニ柄」、「平塚＝七夕＝天の川」をイメージした柄をデザインし、短冊部分に本体をしまうことで持ち運びに便利なエコバッグを提案(=写真下。同社の『マイナビ』に2/15から掲載)。七夕祭りで認知度を高めるプロモーションも考えました。「実際に調査し、生の意見を聞く」ことを重視しているゼミでの学びを評価していただき、自信になりましたし、「モノ」を完成させる難しさ、目標にチャレンジすることの大切さを学びました。新井先生から「努力は報われるね」と、ほめていただいたのが何よりうれしかったです。

【受験生特集】— さまざまなキャンパスライフを紹介します

神奈川産学チャレンジプログラム

ゼミでの学び 実践で評価

※敬称略。()内はゼミと学部学年。()内は企業名と課題

【優秀賞】

内田沙知子、岩田森哉、黒尾浩美、渡辺郁子(馬場杉夫ゼミ・経営3)

「東京ガス横浜支店・「マイホーム発電」の魅力を伝えるプロモーション企画について」

グループワークが決め手

住宅展示場でのアンケートや、経営理論を用いた分析で、他社製品との差別化戦略を立てました。「ガス」の温かさをアピールし、認知度を上げるプロモーションを考え、「エコウィルで変わる生活」をデザインしたエコバックを使ったキャンペーンを提案しました。デザインは評価されましたが、コストとキャンペーン効果の考察の点で具体性に欠けていると指摘され、意見に説得力を持たせることの重要性を再認識しました。それぞれの得意分野を発揮し、完成したプラン。このメンバーだからこそできたと、感謝しています。



【優秀賞】

面高翔五、宮下幸代、治田亜佑美、鈴木啓史、一瀬佳子(馬場杉夫ゼミ・経営3)

「相鉄イン・お客様に支持される宿泊特化型ビジネスホテルについて」

「WHY？」常に考えて

学んでいる経営理論を用いて、ビジネスホテルの課題を分析し、「女性向け」ではなく、「女性の視点」を取り入れた安心感と気配りを機軸としたサービスを提案。予約の段階で、部屋のアメニティーを選択できたり、ベッドやテレビの位置を変えられたりするサービスを「マイルーム機能」と名づけました。



ゼミでも、理論の裏づけのため常に「WHY?(なぜそうなるのか)」という意識をもつようになっています。今回の経験から、自ら研究する姿勢の大切さを学び、与えられるだけでなく、自発的に学ぼうという気持ちになりました。

【優秀賞】

阿久津諒、花田麻依子、鈴木裕一郎、横田遥(中村博ゼミ・商3)

「京浜急行電鉄・交通ICカード“PASMO”を利用した京急の新しいビジネスについて」

相手の目線で“聞く”大切さ

「駅ナカから街ナカへ」をテーマに、PASMO利用者拡大のため、

交通網と電子マネーを一体化させて、沿線の地域活性化を目指しました。改札を広告媒体として企業から広告収入を得るプランや、レジャーや観光に関連した3Dを使ったイラストを入れた広告を提案。プランを夢物語に終わらせないため、収益性と実現性に説得力をもたせるよう苦心しました。



目標に向かって半年間作業してきた中で、一方的に主張するのではなく、「相手の目線で聞く」ことの大切さを学びました。

【優秀賞】

安洋輔、井出梓、宝川友理絵(中村博ゼミ・商3)
「CFSコーポレーション・プライベートブランド商品「HJBシリーズ」
の販売戦略の提案」

他大学との切磋琢磨が刺激

身近な商品を扱っている企業の販売戦略を学びたいと応募しました。学生らしい発想でプライベートブランド商品とコエンザイムQ10の販売促進策、オリジナリティーある売り場作りと顧客へのアプローチ方法を考えました。ゼミや授業で学んでいることを応用しながら、消費者の立場にたってマーケティングを学ぶことができ、貴重な経験となりました。



経営幹部の皆さんの前でのプレゼンテーションでは、他大学の研究のレベルの高さに刺激を受け、今後のゼミ活動の発奮材料となりました。

【受験生特集】— さまざまなキャンパスライフを紹介します
活躍する卒業生を訪ねて

ゼミや課外活動など本学での学びや交流が、いまの仕事にどう生かされたか。今後の抱負は—。さまざまな分野で活躍する若き卒業生3人に聞いた。

政治は一人ひとりのもの「同世代」と机並べて

大田区議会議員、「民主党大学東京」の副事務局長

森 愛さん(平12経済)

「区民一人ひとりの等身大の願いを、政治にぶつけよう」

昨春の東京都大田区議選で29歳という最年少で初当選。「政治を身近なものにしたい」とひたむきに呼びかける姿が共感を呼んだ。

政治の世界とは無縁の、ごく普通のサラリーマン家庭に育った。幼いころ見たテレビ番組「兼高かおる世界の旅」をきっかけに、世界の多様性に目を向けるようになる。小・中学校と生徒会長。高校時代は、フランスが核実験を強行したことに強い憤りを感じた。

フリーの雑誌レポーター、ナレーターから民主党の岩國哲人衆院議員秘書に。大田区を地盤とする岡崎幸夫都議の選挙運動の応援アナウンスを頼まれ、JR蒲田駅で年金の問題点を訴える姿が関係者の目に留まったのがきっかけだ。

岡崎都議に背中を押されて区議の道へ。横浜生まれで確固とした地盤はなく「もう少し人生経験を積んでからにしたら」との両親の反対を押し切ったの出馬だった。「環境に配慮し、『安全』『安心』を念頭に置いた一人ひとりの身の丈に合った都市づくりが、いまこそ必要です」。

「政治は政治家のものではない。自分たちのもの」と、特に年代の近い若年層に訴える。政治家や政策スタッフ、NPO(非営利団体)スタッフなど社会で活躍する人材を育てる「民主党大学東京」(<http://www.tokyo.dpj.or.jp/seinen/>)の副事務局長を務め、「いまの社会を変えたい」若者たちと机を並べ、勉強会に励んでいる。

本学の経済学部国際経済学科の第一期生。室井義雄ゼミ。サークル(自然探索愛好会)活動で奥多摩・御岳山に出かけ、満天の星を夜通し眺めたあと授業へ。「室井先生から遅刻の代わりに、『星の探索レポート』を、と命ぜられました」と懐かしむ。

のびのびとしたゼミ活動の中から「経済はすべての生活の礎であると教えられ、本物の豊かさとは何かを考えました」。



【受験生特集】— さまざまなキャンパスライフを紹介します
活躍する卒業生を訪ねて

ゼミや課外活動など本学での学びや交流が、いまの仕事にどう活かされたか。今後の抱負は—。さまざまな分野で活躍する若き卒業生3人に聞いた。

「美の追求」だけでなく「自己表現」の手段に

ヘアメイクアップアーティスト

鈴木 理絵さん(平12商)

「メイクアップとは自己表現。単なる美の追求ではありません」。顔の分析をし、現実をつかみ、到達点であるゴールデンバランスを作り上げる。その過程には、道具である“手”を通じて人とのデリケートなかかわりがある。

「物事を多角的に見る姿勢、コミュニケーションする力がとても大事ですね」



▲メイクアップの指導をする鈴木さん(中央)

「ヘア&メイク」の(株)ノニカジャパンのアーティストとして化粧品メーカーを中心に出張講師、同社スクールの講師を務めるかわら舞台のプロデュースも手掛ける。昨年は専大在学中に所属した課外講座「HEIB講座」の講師として、後輩たちにメイクアップ指導も。

化粧品やメイクは少女時代からの夢だった。「あこがれを仕事にできてこんな幸せなことはありません」。

専大では、市場に出る「モノ」がヒットする背景を学ぼうと「商品学」がテーマの見目洋子ゼミに入った。

「見目先生は専大に着任されたばかりで、私たちが一期生。先輩がいない中で、レポーターとコメンテーターを交互に行うプレゼンテーションを毎回行い、徹底的に鍛えられました」

「HEIB講座」では、合宿や講座を通して女性が社会に進出するために必要な基本を教えられた。大学は、壇上の先生から講義を聞くだけのイメージとは違う、新鮮な世界だった。「あの時の学びが、社会に出て活かされていると実感することが何度もあります」。

卒業後一時、エステティシャンになったが、画一的な美しさを求める仕事になじめず、メイクアップの世界に飛び込んだ。

醍醐味(だいごみ)は、メイクを施した時のモデルの反応を見る瞬間だ。自らの手でその人の本来の美しさを引き出す喜び。そのためには技術を磨くと同時に本質を見抜く技量を養うことだと思っている。

「周りの森をしっかり見ることができる、一本の木でありたい」。自らの生き方をしなやかな表現で語った。

【受験生特集】— さまざまなキャンパスライフを紹介します

活躍する卒業生を訪ねて

ゼミや課外活動など本学での学びや交流が、いまの仕事にどう生かされたか。今後の抱負は一。さまざまな分野で活躍する若き卒業生3人に聞いた。

声だけで演技する俳優 もっと内面を出したい



「ゼロの使い魔」などに出演のアニメ声優

井上奈々子さん(平18文)

本学4年次在学中にアニメ「はっぴいセブン」(UHF放送局放映)の中学生役でアフレコデビュー。一昨年から始まったアニメシリーズ「ゼロの使い魔」(同)では、主人公の魔法使いのライバルを演じて人気を得た。本作は今夏に第3弾の放映が決まっている。

アニメ声優は、どんなに「売れっ子」でも必ずオーディションに合格しなければ役が回ってこない。「これからが実力の勝負と思っています。ジャンルの幅を広げ、洋画の吹き替えにも挑戦したい」と大きな目を輝かせた。

少女コミックとアニメの魅力に引き込まれ、中学生で自他ともに認める“アニメ・オタク”に。「なりたいのはアニメの声優。それしか考えられませんでした」。

現代国語と古典が得意で、専大附属高から文学部日本語日本文学科日本文学文化専攻に進んだ。

海外の大学とのネット共同授業や小説『里見八犬伝』を基にオペラの台本を制作するなどエネルギッシュに活動する板坂則子ゼミに入り、刺激を受けた。

母校で「古典」を教え、「教え子」と高校時代の自分が重なった教職課程での教育実習。サークル(北海道人会)の仲間と楽しんだ北海道旅行。晴れた日に生田キャンパス9号館屋上のベンチに座り、学友とおしゃべりに夢中になって駆け足で教室に向かったこと……。

「そんな一つひとつが大切な思い出。いまの自分の糧になりました」

声だけで「しぐさ」を表現する声優は、俳優と同じ演技力が要求される。

「役を理解し、感情や意思をイメージしたはずなのに、いざ声に出して表現すると違ったものになっている。音響監督に厳しく指摘され、『なぜなの?』と泣きたくなることが何度も。自分を磨き、内面を出せるようになりたい」。日々の鍛錬と共に「初心を忘れずに」と肝に銘じている。

念願のアニメ声優になったものの、「夢をかなえた実感はない」と言う。「役柄と格闘する毎日。終わらない戦いですね」。

